島田美術館

熊本市西部にあるこの小さな私設美術館では、藩主・細川忠利（1586-1641）とその後継者・細川光尚（1619-1650）の庇護のもと、生涯の最後の 5 年間を熊本で過ごした流浪の剣豪・宮本武蔵（1584-1645）に関する遺物を中心に展示しています。武蔵ゆかりの品々は現存しているものが少なく、その多くは熊本に保管されており、館内にはおそらくそのうちの 3 分の 1 が所蔵されています。これらは、日本の古美術をこよなく愛し、開館と同じ年に他界した島田真富（1886-1977）が収集したものです。

収集品は絵画、墨絵、写本、刀剣などからなります。最も貴重な作品は、武蔵の命日である 5 月頃に展示されることが多いです。紙に描かれた作品は長時間日光に当てることができないため、年間を通して交代で展示されています。

剣豪の肖像画
晩年の武蔵を描いた有名な肖像画などが見どころです。本人が顔の左側をこちらに向けて描かれていることから、死後の肖像画として知られています。日本画の慣例では、このような描き方は、描かれている人が亡くなっていることを意味します。制作者は、実際の武蔵とその思想に精通していたと思われます。武蔵の五輪書の「水の巻」に描かれている通りに、敵と対決する瞬間の剣豪の表情や姿勢が捉えられているのです。

この肖像画は、館内に収蔵されている江戸時代（1603-1868）後期の他の肖像画と比較してみると面白いです。武蔵は死後まもなく半ば神話的な存在へと変貌を遂げ、常に鋭い視線、両肩にかかった髪、両手に握られた刀、常に素足であることなど、肖像画の形式がはっきりと定まりました。収集品の中で最も印象的な肖像画の一つは、有馬喜兵衛と最初の有名な決闘を行った 13 歳の時の武蔵の姿です。髪の毛は伸び放題で、顔は浅黒く不潔で、手足と胸は渦巻き状の黒髪で覆われています。これらの詳細はすべて、死後に出版された武蔵の伝記に基づいています。

武蔵ゆかりの品
美術館の所蔵品には、画家としても戦士としても活躍した武蔵の水墨画や、『五輪書』の「風の巻」の写本などがあります。この写本は、武蔵に原文を託された弟子の寺尾孫之丞が 1651 年に作成したものです。武蔵が書いた原本は現存しません。吉岡派の師匠を倒すために武蔵が使用し、細川家の傍系を通じて受け継がれた武器など、刀剣も多数あります。武蔵が軽さを追求してデザインした刀は、実用性の高い透かし細工の「なまこ籠手」を備えています。

別の部屋では、江戸時代（1603–1868）と明治時代（1868–1912）の品々が展示されています。カフェでは現代美術家の作品が展示されており、瞑想に最適な小さな庭園もあります。

島田美術館を訪れた人は、武蔵が晩年を過ごした霊巌洞にも足を運んでみてはいかがでしょうか。
地元のタクシー会社の中には、両方の目的地への団体旅行を提供しているところもあります。